

知覚経験における現前性

オーガナイザー

太田紘史（東京大学大学院総合文化研究科）

提題者

源河亨（慶應義塾大学大学院文学研究科）

小口峰樹（玉川大学脳科学研究所）

太田紘史（東京大学大学院総合文化研究科）

外界に関する情報を収集し、それに基づいた認識と行為をなす生物にとって、知覚は不可欠の心理的要素である。認知科学において知覚の本性は探求されてきたものの、知覚が持つ決定的に重要な性格の一つが、いまだ十分には解明されていない。その性格が、知覚の——とりわけ知覚経験の——現前性と呼ばれるものである。知覚は、信念や欲求といった心的表象とは異なり、その対象を現前するものとして、経験者たる我々に認識させる。このような現前性という性格を捉えることができなければ、知覚経験に関するいかなる科学理論も不完全なものにとどまるだろう。

今回のワークショップでは、この現前性という性格について理論化を進めるとともに、知覚経験に関する一般的な理解を深めることを目指す。とくに今回は、現前性について二つの主要な問いを立て、それらを軸として議論を進めたい。第一に、我々の知覚経験において、その対象のどの範囲が現前しているのか（現象論的な問題）。第二に、我々の知覚経験における現前性を担保するのは、脳内のどのような情報処理機能であるのか（メカニズムの問題）。これらの問題について、以下の提題を通じて検討する。

第一に源河は、「非感性的完結化と知覚的現前」という提題を通じて、現象論的な問題を検討する。我々の視覚経験において、色や形といった特徴が現前することは間違いないだろうが、現前はそういった感覚的性質に限られるのだろうか。例えば、机とその上にある本を見るとき、本によって隠されている部分にも机の一部があるように経験される。このような知覚経験のあり方は「非感性的完結化」と呼ばれるが、そこではその隠れた部分は、経験において現前していると言えるだろうか。源河は、信念、イメージ、あるいは感覚運動スキルといったものによって、この完結化における現前性を説明し去ることができるかを検討し、知覚経験における現前性の現象論的な本性について検討する。

第二に小口は、「二重視覚システム説と現前性」という提題を通じて、主にメカニズムの問題を検討する。認知神経科学における二重視覚システム説によれば、ヒトの視覚神経系のうちには、視覚的認識のために働く背側経路と視覚的行為制御のために働く腹側経路が存在する。さらにそれによれば、腹側経路は外界中心的な参照枠において世界を表象するとともに視覚経験を担う。だがこの見方は、自己中心的な参照枠のもとに視覚的光景を描くという視覚経験のあり方に一致しないように思われる。この点は近年、視覚経験における現前性の感覚をどのような視覚機能として理解するかという形で、係争点になっている。小口は、意識的知覚に関する中間レベル表象説を援用することで、腹側経路のうちに適切な仕方で現前性の感覚を位置づけることができると提案する。またそのうえで、この提案が知覚の哲学理論——選言説と志向説——の競合に対してどのような含意を持つのかについても検討する。

最後に太田は、「現前性を巡る係争点」という提題を通じて、議論の整理を行う。関連する係争点を整理しながら、上記二つの提題を含めた諸見解に対して批判的な検討を与え、現前性の適切な理解に向けた議論を促すことを目指す。